

移動方向動詞と結合している「ていく/くる」と「e kata/ota」：人称の移動を対象に

韓, 京娥
九州大学韓国研究センター

<https://doi.org/10.15017/21804>

出版情報：言語文化論究. 28, pp.145-156, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

移動方向動詞と結合している
「ていく / くる」と「e kata/ota」
—— 一人称の移動を対象に ——

韓 京娥

九州大学大学院言語文化研究院 言語文化論究 第28号 平成24年2月発行 抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

移動方向動詞と結合している「ていく / くる」と「e kata/ota」

— 一人称の移動を対象に —

韓 京娥

1. はじめに

移動を表す日本語の「行く / 来る」と韓国語の「가다 kata (行く) / 오다 ota (来る)」(以下、「kata/ota」)¹は、共に拡張された用法を持つが、その中で以下のように移動の方向を表す動詞(以下、移動方向動詞)と結合し、移動を表す用法がある。

- (1) a. 暗い 階段を おりていくと 受付で 入場料を 払った。 【4】²
 b. 어두운 계단을 내려가서 요금을 지불했다. [4]
 etuwun kyeytanul naylyeka-se yokumul cipulhayssta
 おりていって
- (2) a. のぼってきた 階段の 丁度 裏側, … (省略) … 【冷静 R】
 b. 올라온 계단의 정 반대쪽, … (省略) … [冷静 R]
 ollao-n kyeytanuy ceng pantayccok
 のぼってきた

移動方向動詞と結合している「ていく / くる」と「아 / 어 / 여 가다 / 오다 a/e/ye kata/ota (テイク / クル)」(以下、「e kata/ota」)は、(1) と (2) のようによく対応し、両言語は類似した意味機能を表すと指摘されている(塚本(2006)など)。

ところが、両言語において「おりの、のぼる」のような移動方向動詞は、後述するように単独の使用に差があり、それらに後続している「ていく / くる」と「e kata/ota」の意味機能には、違いが予想されるが、両言語の違いについては今まで取り上げられてこなかった。

本稿では、日本語と韓国語における<事態把握>の違いと「ていく / くる」と「e kata/ota」を関連付けて考察する。「ていく / くる」と「e kata/ota」における違いは、テキストを構成する視点の結束性にも大きく影響を及ぼし、日本語と韓国語では、<自己・中心的>なスタンスの<主観的把握>(池上(2006)など)に大きな違いがあることを明らかにする。

2. 先行研究

移動方向動詞と結合している「ていく / くる」と「e kata/ota」を取り上げ、詳しく論じている先行研究は、管見の限り見当たらない。だが、現場モードと説明モード³に分けて、「ていく / くる」の使用の差より日本語母語話者と日本語学習者の<事態把握>と<見え>の形成の違いについて考察している堀江(2009)は、示唆的である⁴。

本稿の目的は、移動方向動詞と結合している「ていく / くる」と「e kata/ota」を対象にし、両言語の類似点と相違点を明らかにすることである。ただし、「ケンが部屋に入ってきた」という文にお

いて、「動詞「くる」は、ケンの「入る」という移動が話者の方向に向かっていることを表している」という古賀（2008：241）の指摘のように、移動主体が第三者の場合、「ていく／くる」（「e kata/ota」）が第三者のケンの移動を表しているのかそれとも話し手との関わりを表しているのかが不明確である。したがって、本稿では、話し手の移動に限って考察を行うことにする。

3. 「ていく／くる」と「e kata/ota」

3.1 移動方向動詞単独の使い方における違い

まず、簡単に日本語と韓国語では、移動方向動詞単独の使い方には差があることを見ておこう。

- (3) a. エレベーターから おりた。
 b. 엘리베이터에서 내렸다.
 eyllipeyitheeyse naylyessta
 おりた
- (4) a. エレベーターで おりよう。
 b. 엘리베이터로 {내리자 / 내려가자}.
 eyllipeyithelo {*naylica / naylyeka-ca}
 *おりよう / おりていこう

「おりる」と違って単独の「내리다 naylita（オリル）」は、(3b)のように、乗り物からおりる場面では使用可能であるのに対して、(4b)のように、上の階から下におりる場面では使用不可能で、必ず「e kata」か「e ota」を伴わなければならない。単独の移動方向動詞の文に比べ「e kata (ota)」の文は、移動の過程が捉えられているニュアンスが強く、「e kata」は、出発点から捉えた移動を表し、「e ota」は、到着点から捉えた移動を表していることになる⁵。韓国語では、動詞ごとに、また(3b)と(4b)のように、同じ動詞でも用いられる場面によって移動方向動詞単独の使用可能性に差があることが多く、韓国語学では「移動方向動詞 + e kata/ota」が一つの単語としてみなされることが多い⁶。

3.2 日本語と韓国語における〈事態把握・表現〉の違い

「ていく／くる」と「e kata/ota」について考察する前に、情報の重要性という観点から日本語と韓国語における〈事態把握・表現〉の違いについて見てみよう。次の(5)は、健康のためにエレベーターを使わずに階段を使うことを約束した二人の会話の場面で、(6)は、約束の場所で話し手を待っている友達から「今どこ。」という電話がかかってきた場面である。

- (5) (一階でエレベーターからおりた場面、私たち三日坊主だねという A に B が言う。)
- a. 昨日は 階段で {おりた / (?) おりてきた}。
 b. 어제는 계단으로 {*내렸어 / 내려왔어}.
 eceynun kyeytanulo {*naylyesse / naylyeo-asse}.
 *おりた / おりてきた
- (6) a. たった今 階段を {おりた / おりてきた} ところ。
 b. 지금 막 계단을 {*내렸어 / 내려왔어}.
 cikum mak kyeytanul {*naylyesse / naylyeo-asse}.
 *おりた / おりてきた

(5) で重要な情報は、エレベーターでおりたか階段でおりたかという方法・手段であるのに対して、(6) では、階段をおりたこと自体が重要な情報となる。ただし、(6a) の「てくる」が適格になっていることから、(6a) では「おりる」が表す移動一過程と方向の他に、「てくる」が表す移動一過程と到着点が表されることが可能であることが分かる。「おりる」と「てくる」は、移動の過程を共有しているが、(5a) と (6a) の「てくる」の差から、「てくる」が適格となるのは、到着点が重要な情報として捉えられ得るかどうかが関係しているといえよう。(6a) で重要な情報は、おりた(上→下)かのぼった(下→上)かという移動の方向や、おりる、または、のぼる過程ではなく、おりきったことであるため、「てくる」は適格となる。一方、(5a) は、到着点が重要ではないと、それは明示される必要がないことを示している。

このように「てくる」は、「てくる」に含まれている情報が重要なときのみ明示されればいいのに対して、それぞれの b の「내리다 naylita (オリル)」は、上から下への垂直方向であることが表されるだけで、単独では階段をおりる過程を表すことができない。そのため、「e kata」か「e ota」が義務的に用いられる。(5b) と (6b) は、すでに話し手が到着点といえる階段の下にいるため、「e ota」が用いられている。

以上のように、「てくる」と「e ota」が明示化される理由は異なる⁷。この点を踏まえた上で、以下で「ていく / くる」と「e kata/ota」の意味機能の違いについて見ていくことにする。

3.3 「てくる」と「e ota」

自分(話し手)の移動の表し方には、説明モードで表す場合と現場モードで表す場合がある(用語は、堀江(2009)から引用)。

次の(7)は、部屋の外のリビングに、(8)は、部屋の中に話し手がいる。(7)と(8)は、共に昨日自分が何をしていたかを話している説明モードの場面といえるが、それぞれの a の「てくる」は不適格で、b の「e ota」は適格である。

- | | | | | |
|--------|----------|---------------------------------|------------|----------|
| (7) a. | 部屋から | { <u>出て</u> / * <u>出てきて</u> } | キッチンに | 行った。 |
| b. | 방에서 | {* <u>나</u> / <u>나와</u> } | 주방에 | 갔다. |
| | pangeyse | {*na / nao-a} | cwupangey | kassta |
| | | 生じて / 出てきて | | |
| (8) a. | 部屋に | { <u>入って</u> / * <u>入ってきて</u> } | 勉強して | いた。 |
| b. | 방에 | {* <u>들어</u> / <u>들어와</u> } | 공부하고 | 있었다. |
| | pangey | {*tule / tuleo-a} | kongpuhako | issessta |
| | | 入って / 入ってきて | | |

(7) は、部屋から出たこととキッチンに行った一連の動作を表す文で、(8) は、勉強していた状態を表している文である。(7a) と (8a) では、移動そのものは重要な情報ではなく、特別な文脈がない限り移動に焦点は置かれなため、実際に物理的移動が起り、また、話し手が移動の到着点といえる場所にいるにも関わらず、「てくる」を用いることができない。一方、それぞれの b は、「나다 nata (逐語訳：生じる)」「들다 tulta (入ル)」だけでは移動の過程が表れないため、移動の過程を表す「e ota」か「e kata」が伴われる。話し手が到着点にいる場合は、到着点を表す「e ota」が用いられる。

次の(9)は、自分の一日をビデオ撮影で紹介する現場モードの場面であるが、「てくる」は適格である。

- (9) a. 部屋から {出ました / 出てきました}. これから キッチンに 向かいます. …
 b. 방에서 {*났습니다 / 나왔습니다}. 지금부터 주방으로 가겠습니다. …
 pangeyse {*nasssupnita/nao-asssupnita}. cikumpithe cwupangulo kakeysssunnita.
 生じました / 出てきました
- (10) a. 部屋に {入りました / 入ってきました}. ベッドと 机が あります. …
 b. 방에 {#들었습니다 / 들어왔습니다}. 침대와 책상이 있습니다. …
 pangey {#tulesssunnita/tuleo-asssupnita}.chimtaywa chayksangi issunnita.
 入りました / 入ってきました

(9a) の「出る」、(10a) の「入る」は、単独で移動を表すことができるため、出た、入っただけでも話し手が部屋の外や中にいることが表れる。しかし、出た、入っただけではいつ出たか入ったかは不明確となる。先行研究の指摘 (池上 (2006) など) によれば、日本語話者の <好まれる言い回し> では、話し手の <イマ・ココ> は、重要な情報である。(9a) と (10a) において「てくる」が適格になるのは、「てくる」によって到着点が明示され、発話時点の <イマ・ココ> に話し手が存在していることが示されるためであると考えられる⁹。さらに、「てくる」の明示化によって、話し手が現場に存在しているニュアンスが強くなるため、より出来事に臨場感が与えられるといえよう。(9b) と (10b) は、共に「e ota」が伴われ、移動が表される。

以上のように、「てくる」は、説明モードと現場モードによって明示化に差があるのに対して、「e ota」には差がないことが分かる^{10,11}。「e ota」は、移動の到着点であることを表せばいいのに対して、「てくる」は、移動の到着点のみを表すのではなく、その到着点が明示されるべき重要な情報であることも表している。移動の到着点を表す「e ota」は、より物理的で、情報の重要性和関係している「てくる」は、より心理的であるといえよう^{12,13}。

3.4 「ていく」と「e kata」

ここでは、「ていく」と「e kata」の表す移動の過程における違いについて見てみよう。次の (11) は、富士山に登った経験があることを述べている文で、(12) は、東京タワーに登りたい話し手の希望・願望を述べている文である。したがって、(11) と (12) は、共に移動の過程は問題にならない文である。

- (11) a. 富士山には 何回も {登った / *登っていった} ことが ある。
 b. 후지산에는 몇번이나 {오른 / 올라간} 적이 있다.
 hwucisaneynun myechpenina {olun / ollaka-n} ceki issta.
 登った / 登っていった

(韓 (2009))

- (12) a. 東京タワーに {登りたい / *登っていきたい}。
 b. 도쿄타워에 {오르고 싶다 / 올라가고 싶다}。
 tokkyothaweey {oluko sipta / ollaka-ko sipta}。
 登りたい / 登っていきたい

(11a) と (12a) の「ていく」は、移動の過程が問題にならない文では用いられないのに対して、(11b) と (12b) の「e kata」は、移動の過程が問題にならない文でも用いられる。このことから「ていく」には、常に移動の過程が含まれているのに対して、「e kata」には、移動の過程は含まれても含まれなくてもよいことが想定できる。

- (13) a. 部屋から { 出た / 出ていった }。
 b. 방에서 { *났다 / 나갔다 }。
 pangeyse { *nassta / naka-ssta }。
 生じた / 出ていった
- (14) a. 二階から 一階に { おりた / おりていった }。
 b. 2층에서 1층으로 { *내렸다 / 내려갔다 }。
 2chungeyse lchungulo { *naylyessta / naylyeka-ssta }。
 おりた / おりていった

(13a) と (14a) は、「出る」「おりる」のみでも中から外へ、上から下へという移動の方向は表れる。それに、部屋の中と二階に身を置いている話し手は、移動の出発点に立っている。先行研究の指摘¹⁴のように、話し手と他者を区別し、常に話し手(の視点)が中心になる日本語話者は、常に出発点の視点を保持していることになる。移動の出発点に立っている話し手自らにとって移動の方向(中→外、上→下)は、当たり前のことである。「イマ・ココに出来したモノ・コトガラ、すなわちイマ・ココの<見え>のままに言語化する傾向(近藤(2009:80))」がある日本語話者¹⁵にとって、移動の方向(中→外、上→下)は、<見え>の中に含まれないことを意味するため¹⁶、明示化される「ていく」は、移動の過程を表していると考えてよいだろう。一方、(13b) と (14b) は、「나다 nata (逐語訳:生ジル)」「내리다 naylita (オリル)」のみで移動を表すことができず、義務的に「e kata」か「e ota」が伴われ、移動の方向・過程を表すが、部屋の中からと二階からの移動を表しているため、「e kata」が選ばれている。ところで、移動の方向(中⇔外、上⇔下)のみを表すことのできる「e kata」に比べ、移動の過程に焦点が置かれる「ていく」の出現は、より文に臨場感を与えているといえよう。

本多(1994:172)は、言語形式の明示化について次のように指摘している。

- (15) 音形のある言語形式は知覚における<見え>を写し取ったものに相当する。すなわち言語表現において音形のある言語形式によって明示的に指示することが可能なのは、<見え>の中に含まれるものに限られる。

本多に従うと、「てくる」と「ていく」は、それぞれ到着点の重要性と移動の過程が<見え>の中に含まれることになる。これに対し、「e ota」と「e kata」は、到着点と出発点が含まれることになる。

以上で見てきたように、「ていく／くる」と「e kata/ota」には、意味機能に違いがある。「言語によって表現する必要性が高い出来事(松本(2008:36))」という移動は、テキストの中にも頻繁に出てくるはずであり、文の集合であるテキストの中では、より大きな違いが引き起こされているに違いない。以下では、このような「ていく／くる」と「e kata/ota」の違いがテキストにおける視点の結束性に大きく影響を及ぼしていることについて考察する。

4. 視点の結束性における違い

一人称小説の日本語原作5冊とそれぞれの韓国語翻訳本5冊から、「でる、はいる、おりる、のぼる」(漢字、活用形含む)と韓国語訳を調査した。調査結果は、以下の表1のようである。使用した資料は、末尾の調査資料のとおりである。

表1 「でる、はいる、おりる、のぼる」と韓国語訳の対応関係

		基本形 (naseta ¹⁷ /tuleseta ¹⁸ / oluta/naylita)	基本形 ¹⁹ + kata	基本形 + ota	その他	合計
デル	でる (108)	30	29	40	9	108
	でていく (5)	2	3	0	0	5
	でてくる (1)	0	0	0	1	1
ハイル	はいる (47)	18	22	3	4	47
	はいつていく (4)	3	1	0	0	4
	はいつてくる (0)	0	0	0	0	0
ノボル	のぼる (63)	30	27	0	6	63
	のぼつていく (2)	1	0	0	1	2
	のぼつてくる (1)	0	0	1	0	1
オリル	おりる (34)	2	17	13	2	34
	おりていく (8)	0	4	2	2	8
	おりてくる (0)	0	0	0	0	0

以下にいくつかの用例を示す。(16) から (19) のそれぞれの a には、「e ota」が対応している。

(16) a. 베란다で夕方の風にふかれながら、私はからからと涼しい音をたててグラスの水を揺らす。… (省略) …私は部屋に ↓入って / (?) 入っていつて / *入ってきて ^[20] カーディーガン을羽織り、グラスの中身を洗面台にあげた。 [冷静 R]

b. 베란다에서 저녁 바람을 맞으면서 나는 잔을 흔들었다.
peylantaeyse cenyek palamul macumyense nanun canul huntulessta.
얼음이 부딪쳐 카랑카랑 시원한 소리를 낸다. … (省略) …
elumi puticchye khalangkhalang siwenhan solilul naynta.
나는 방으로 {*들어 / (?) 들어가 / 들어와} 카디건을 걸치고, 남은
nanun pangulo {*tule / (?) tuleka/tuleo-a} khatikenul kelchiko, namun
{*入って / (?) 入っていつて / 入ってきて}
아말레드를 싱크대에 부어 버렸다. [冷静 R]
amalleytulul singkhutayey pue pelyessta.

(17) a. ぼくたちは横になって目をつぶっているアカサカさんに軽く頭をさげて、踊り場を {おりた / おりていつた / *おりてきた}。つぎの日も暑い一日だった。 [4]

b. 우리는 누운 채 눈을 감고 있는 아카사카 씨에게
wulinun nwuwun chay nwunul kamko issnun akhasakha ssieykey
가볍게 머리 숙여 인사를 하고, 층계참을
kapyepkey meli swukye insalul hako, chungkyeyechamul
{*내렸다 / (?) 내려갔다 / 내려왔다}. 다음 날도 무더운 하루였다.
{*naylyessta / (?) naylyeka-ssta/naylyeo-assta}.taum nalto mutewun halwuyessta.
{*おりた / (?) おりていつた / おりてきた}

[筆者訳]²¹

(18) a. 本を書棚にもどして、ぼくたちは図書館を{でた/でていった/*でてきた}。ここではお
おきな声でしゃべれない。 [4]

b. 우리는 도서관을 {*났다 / (?) 나갔다 / 나왔다}. 안에서는
wulinun tosekwanul {*na-ssta/ (?) naka-ssta/nao-assta}. aneysenun
{*でた / (?) でていった / でてきた} 中では
큰소리로 떠들 수 없어 도서관 뒤편에 있는 넓은
khunsolilo ttetul swu epse tosekwan twiphyenyey issnun nelpun
大きい声で騒ぐ こと できないため 図書館 後ろ側に ある 広い
어린이 공원으로 향했다. [4]²²
elini kongwenulo hyanghayssta.
子供 公園へ 向かった

(19) a. 「このあとは？」マーヴが訊き、私は、なにも、とこたえて、私たちは店を
{でた/でていった/*でてきた}。「あたたかい日だね」 [冷静 R]

b. “이제 어떻게 할 거야?” 마빈이 물었다. 나는 딱히, 라고
“icey ettehkey hal keya?” mapini mulessta. nanun ttakhi, lako
대답하였다. 우리는 가게를 {*났다 / (?) 나갔다 / 나왔다}.
taytaphayessta. wulinun kakeylul {*nassta/ (?) naka-ssta/nao-assta}.
{*でた / (?) でていった / でてきた}

“날씨가 아주 따뜻하데.” [冷静 R]
“nalssika acwu ttattushantey.”

(16) は、動作の連続を表す文で、(17) は、自分の体験を淡々と述べている文である。(18) は、話者の心情が述べられている文で、(19) は、天気について述べている文である。(16) から (19) は、すべて到着点が重要な情報であるとはいえない。さらに、3.4 で指摘したように、それぞれの a の話し手は、「ていく」の視点が保たれているのに (例えば、16a) の場合、ペランダー→部屋→洗面台)、「てくる」が出現すると、視点が止まってしまう (視点の中止と呼ぼう)。したがって、重要な情報がないうところでの「てくる」の出現は、話し手 (読み手) の視点の結束性に乱れを引き起こす。話し手の視点と符合する「ていく」は、過程を際立たせる場合明示化される。これに対し、「e ota」の出現は到着点を表し、話し手 (読み手) の視点を到着点に向けさせるため、より話し手 (読み手) が発話場所に身を置いている感じが強い。一方、出発点を表す「e kata」は、話し手はすでに発話場所には存在せず、過去の体験を淡々と述べている感じの文になる。

以上のように、テキストの中の<イマ・ココ>は、日本語では「ていく」で表せるが、韓国語では「e ota」で表される。日本語と韓国語では、<自己・中心的>なスタンス (池上 (2006) など) の表し方に違いがあるといえよう。

5. おわりに

移動方向動詞と結合している「ていく/くる」と「e kata/ota」の考察から、以下のことが明らかになった。

- ① 「ていく」は、移動の過程を明示し、「てくる」は、移動の到着点が重要な情報として捉えられていることを表す。言い換えれば、移動の到着点が重要な情報として捉えられない場合「て

- くる」は、文に明示されない。一方、「e kata」は出発点から、「e ota」は到着点からの移動を表す。
- ② 「ていく／くる」と「e kata/ota」の意味機能の違いは、テキストの結束性を構成する視点にも大きく影響している。基本的に日本語では、「ていく」で視点が維持されるため、「てくる」が出現すると、視点の中止が起こる。これに対して韓国語では、話し手自らの移動が出発点よりの場合は「e kata」、到着点よりの場合は「e ota」によって視点の結束性が保たれる。
- ③ テキストの中の〈イマ・ココ〉は、日本語は「ていく」で表されるのに対して、韓国語は「e ota」で表し、両言語における〈主観的把握〉（池上（2006）など）にも大きな違いがある。

本稿は、話し手一人が関与している出来事である点、また、認知の二大要素といわれる（定延 2006：183）移動で両言語の違いが明らかになった点で意義が大きい。さらに、このように日常生活の中で最も基本といえる移動の捉え方における違いは、両言語の事態把握に大きな違いが潜んでいる可能性を物語っているといえる。よく教育の現場で取り上げられている日本語母語話者と日本語学習者の談話における視点及び表現・理解の違いについても説明の手がかりを提供してくれるのではないだろうか。

「ていく／くる」と「e kata/ota」の使用には、話し手の視点が欠かせない。特に、「てくる」と「e ota」には、大きな視点の違いがあると考えられる²³。今後第三者の移動を含め、考察を深めていきたい。

注

- * 本稿は、日本言語学会第142回大会での口頭発表（2011年6月18日、日本大学）に基づいて作成している。
- ¹ 韓国語のローマ字表記は、Yale式に従う（『A KOREAN-ENGLISH DICTIONARY』（1967）、Samuel E. Martin et al., Yale University Press, New Haven and London）。
- ² 原作は【 】で表し、翻訳本は[]で表す。以下、同様である。
- ³ 堀江（2009：76）の現場モードと説明モードは、以下のようである。
- (1) a. 現場モード：発話の場＝事態の「場」そこで「今」「ここ」で共有の〈見え〉を構築している。
b. 説明モード：発話の場と事態の場は異なる。発話の場では話し手の〈見え〉に共有を図る。
- ⁴ 堀江（2009）に完全に同意していることを意味するのではない。
- ⁵ 出発点（から）あるいは到着点（から）は、出発点より、到着点よりの意味も含まれている。以下、同様である。
- ⁶ 「내리다 naylita（オリル）」以外の動詞について簡単に見ると、逐語訳が「生ジル（など）」に当たる「나다 nata」は、単独で移動を表すことができない（[*방에서 나다 *pangeyse nata（*部屋カラ生ジル）]。「들다 tulta（入ル）」は、移動に関係なく部屋に入ったかどうかの問題になっている場面に限って適格になる（[방에 들다 pangey tulta（部屋ニ入ル）]。「오르다 oluta（ノボル）」は、他の移動方向動詞に比べ単独の許容度が高いが（[산을 오르다 sanul oluta（山ヲノボル）]）、「나다 nata（生ジル）」、「들다 tulta（入ル）」、「내리다 naylita（オリル）」に比べ、どこかをのぼるという出来事自体に移動の過程が含意されているといえよう。
- ⁷ このような現象は、「e ota（kata）」のみではなく、「아/어/여 주다 a/e/ye cwuta（テヤル/クレル）」など、他の補助動詞にも見られる。
- ⁸ #は、文脈を変更すれば適確なることを表す。
- ⁹ 移動方向動詞と結合している「てくる（いく）」は、文法化の度合によって本動詞の性格が強い

と強くないのがあり、「てくる(いく)」の適格性に関係していると考えられる。

- ¹⁰ 現場モードの「てくる(いく)」の方がより間主観的な性格を帯びているといえよう。なお、説明モードと現場モードによって明示化に差があるのは「ていく」も同様であると考えられる。
- ¹¹ 日本語母語話者と韓国人日本語学習者には、説明モードと現場モードでの「ていく/くる」の使用に差が予想されるだろう。
- ¹² 移動における日本語の心理的関与については、韓(2008)を参照されたい。
- ¹³ 日本語に潜んでいるこのような心理的要因は、日本語学習者にとって日本語の習得を困難にさせる一要因になる。
- ¹⁴ 池上(2006など)、『「いま」と「ここ」の言語学』(『月刊言語』Vol.35・No.5)、『自然な日本語を教えるために』(2009, ひつじ書房)などを参照されたい。
- ¹⁵ 韓国語話者に比べ、日本語話者は<見え>のままに話すのみではなく、物理的・心理的側面を含め、(特に話し手と関連した<イマ・ココ>)の状況を詳しく言語化する傾向が強いと考えられる。
- ¹⁶ 先行研究(姫野(2009)など)の指摘のとおり、自己紹介などの場面で日本語話者が「私は田中です」といわず「田中です」というのと同様のことであるといえる。
- ¹⁷ 「나서다 naseta(出ル)」の逐語訳は、「나다 nata(生ジル) + 서다 seta(立ツ)」であるが、一語としてみなされる。「나다 nata(生ジル)」よりは移動のニュアンスが感じられるが、境界線を越えたくらいの移動のようである。
- ¹⁸ 「들어서다 tuleseta(入ル)」の逐語訳は、「들다 tulta(入ル) + 서다 seta(立ツ)」であるが、一語としてみなされる。境界線を越え、中に入ったニュアンスのようである。
- ¹⁹ 「基本形 + kata/ota」における基本形は、「나다 nata(生ジル)」「들다 tulta(入ル)」「오르다 oluta(ノボル)」「내리다 naylita(オリル)」を指す。
- ²⁰ 以下に「ていく/くる」の適格性に対するアンケート調査の結果を示す(2011年4月18日、九州大学18名)。

		○	△	×	合計
(16)	入って行って	10	6	2	18
	入ってきて	1	4	13	
(17)	おりてきた	0	4	14	
(18)	でていった	12	4	2	
	でてきた	3	5	10	
(19)	でていった	14	3	1	
	でてきた	5	6	7	

- ²¹ 韓国語訳には、「층계참을 뒤로 했다 chungkyeychamul twilo hayssta(踊り場ヲ後ニシタ)」に意訳されている。
- ²² 韓国語では、「도서관을 나왔다 tosekwanul nao-assta(図書館ヲ出タ)」に訳され、図書館の建物から出たことになっているため、後ろの文は、原作と違って意識されている。
- ²³ 「(て)くる」は、話し手への移動の到着点を表す。つまり、話し手(の視点)は、常に到着点に存在し、到着点の視点を維持しなければならない。話し手自らの移動の場合、話し手は移動の出発点にいながら、「てくる」によって到着点にも話し手(の視点)が位置する必要がある。だが、話し手は、実際に移動の出発点に存在するため(4節参照)、話し手の視点のみが「てくる」の到着点にあり、

視点の分裂が起こる。したがって、話し手自らの移動に「てくる」が用いられると、もう一人の自分自身あるいは他の何者かによって見られているニュアンスが生じたりする。一方、「(e) ota」は、到着点(より)の視点を表せばよく、話し手は必ずしも「(e) ota」の到着点に存在しなくてもよい。移動している話し手は、自らの移動によって到着点に近づき、到着点に到達することになる。「e ota」は、話し手自分の移動が到着点周辺(到着点(より)の視点)であることを表す。「e ota」に話し手の視点の分裂は起こらず、見られているようなニュアンスは生じない。「(て) くる」と「(e) ota」が共に同じく直示的<意味機能を表すと指摘する徐(2009)の指摘とは違って、両者には共感度・ホームベース(久野1994[1978])と関連し、大きな差があると考えられる。「ていく」と「e kata」の違いと一緒に両言語における視点の違いについては、稿を改めて論じたい。

参 考 文 献

- 池上嘉彦(2006)「<主観的把握>とは何か-日本語話者における<好まれる言い回し>」『言語』Vol.35・No.5:20-27
- 久野暉(1994[1978])『談話の文法』大修館書店
- 古賀裕章(2008)「「てくる」のヴォイスに関連する機能」森雄一、西村義樹、山田進、米山三明(編)『ことばのダイナミズム』、くろしお出版:241-257
- 近藤安月子(2009)「「何食べた?」「うなぎ」(<見え>のままに)『自然な日本語を教えるために』池上嘉彦・守屋三千代(編)、ひつじ書房:78-81
- 定延利之(2002)「時間から空間へ?<空間的分布を表す時間語彙>をめぐって」『対照言語学』、東京大学出版会:183-215
- 徐珉廷(2009)「日本語話者と韓国語話者における主観的な<事態把握>の対照研究」昭和女子大学博士論文
- 塚本秀樹(2006)「日本語から見た韓国語-対照言語学からのアプローチと文法化-」『日本語学』第25巻第3号:16-25
- 韓京娥(2008)「「行く」「来る」と「가다 kata」「오다 ota」の選択要因」日本言語学会第136回口頭発表予稿集:306-311
- (2009)「日本語の「~ていく/くる」と韓国語の「-어 가다/오다-e kata/ota」の意味機能」日本言語学会第138回口頭発表予稿集:98-103
- (2011)「「~ていく/くる」と「-e kata/ota」に関する一考察」日本言語学会第142回口頭発表予稿集:188-193
- 姫野伴子(2009)「「ここはどこ?」(私は見えない)」『自然な日本語を教えるために』池上嘉彦・守屋三千代(編)、ひつじ書房:60-64
- 堀江裕子(2009)「事態把握と<見え>の形成-日本語母語話者と日本語学習者を比較して-」『人文学部研究論集』第21号:71-86
- 本多啓(1994)「見えない自分、言えない自分 言語にあらわれた自己知覚」『現代思想』vol.22-13(11月号):168-177
- 松本曜(2008)「空間移動の言語表現とその類型」『言語』Vol.37・No.7:36-43

調 査 資 料

- 【4】『4TEEN』(2005) 石田衣良、新潮文庫
 [4] 『포틴』(2004) 石田衣良著・양역관訳、작가정신
 【冷静 R】『冷静と情熱のあいだ Rosso』(2001) 江國香織、角川文庫
 [冷静 R] 『냉정과 열정사이 Rosso』(2000) 江國香織著・김남주訳, 소담출판사
 『冷静と情熱のあいだ Blu』(2001) 辻仁成、角川文庫
 『냉정과 열정사이 Blu』(2000) 辻仁成著・양역관訳, 소담출판사
 『蹴りたい背中』(2007) 綿矢りさ、河出書房新社
 『발로 차 주고 싶은 등짝』(2004) 綿矢りさ著・정유리訳, 황매
 『博士の愛した数式』(2005) 小川洋子、新潮文庫
 『박사가 사랑한 수식』(2004) 小川洋子著・김남주訳, 이레

이동방향동사와 결합해 있는 「ていく / くる」와 「e kata/ota」

－ 1 인칭의 이동을 대상으로 －

한 경아

본고는 이동의 방향을 나타내는 동사와 결합해 있는 「ていく / くる」와 「e kata/ota」 구문 중에서 1 인칭의 이동을 대상으로 일본어와 한국어의 <사태파악>의 차이와 「ていく / くる」와 「e kata/ota」를 관련지어 고찰했다.

「てくる」は、 실제로 이동이라는 동작이 일어나 이동의 도착점이라고 할 수 있는 곳에 화자가 있어도 도착점이 중요한 정보로 인식되지 않는 한 문에 명시되지 않는다. 반면, 「e ota」는 도착점(부근)에서의 이동을 나타낸다.

「ていく」는 이동의 과정이 문제되지 않는 문에서는 사용될 수 없다. 그러나, 「e kata」는 이동의 출발점(부근)을 나타내고 있으며, 이동의 과정은 포함되어 있어도 포함되어 있지 않아도 사용가능하다.

「ていく / くる」와 「e kata/ota」의 의미기능의 차이에 의해 일본어와 한국어의 텍스트에 있어서의 시점의 결속성에는 큰 차이가 있다. 기본적으로 일본어는 「ていく」로 시점이 유지되기 때문에 도착점에 초점이 놓여져 있는 「てくる」가 명시되면 「てくる」가 나타내는 초점을 찾기 위해 화자의 시점이 멈춰진다. 때문에 도착점이 중요한 정보가 아닌 곳에 「てくる」가 명시되면 시점의 결속성이 흐트러진다. 이에 비해 한국어는 화자의 이동이 출발점(부근)일 경우에는 「e kata」로, 도착점(부근)일 경우에는 「e ota」로 시점의 결속성을 유지한다.

텍스트의 <지금·여기>는 일본어에서는 「ていく」로 나타내는 반면, 한국어에서는 「e ota」로 나타나 일본어와 한국어에는 <자기 중심적>인 스탠스, 즉, <주관적 파악>(池上 2006 등)의 표현 방법에 큰 차이가 있다.